

# レッジョ・エミリア・アプローチにみる光・映像を扱った造形活動の教育的意義

－情報機器を活用した「幼児の造形表現（保育内容の指導法）」への展開－

吉岡千尋

(奈良芸術短期大学 非常勤講師)

竹内晋平

(奈良教育大学 美術教育講座 (美術科教育))

Educational Significance of Modeling Activities Dealing with Light and Images Related to Reggio Emilia Approach : Application to “Artistic Expression in Early Childhood” Using Information Equipment

Chihiro YOSHIOKA

(Part-time Lecturer, Nara College of Art)

Shimpei TAKEUCHI

(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

**要旨：**日本の幼稚園等においては、造形活動に関連した数多くの実践が重ねられているが、光・映像を扱った題材の報告事例は多くない。そこで本研究では、レッジョ・エミリア市における教育実践の事例を参照して光・映像を保育に取り入れることによる意義について検討し、光・映像を扱った大学授業に展開することによって、その教育的効果について明らかにすることを目的とした。大学授業「幼児の造形表現（保育内容の指導法）」において保育題材に関する演習を行った結果、受講者らは光・映像による造形活動が幼児の造形的体験を豊かにするという効果について考察するとともに、プロジェクタなどの情報機器を活用して多彩な色光・映像を投影することを含んだ活動の意義について理解を深める傾向がみられた。

**キーワード：**レッジョ・エミリア・アプローチ Reggio Emilia Approach

光・映像 Light / Images

保育内容の指導法 Methods of Contents of Childhood Care

情報機器 Information Equipment

## 1. 研究の背景と目的

これまでの日本の保育現場においては、絵画や工作など具体的な材料を使用した造形活動に優れた実践が多い一方で、光・映像を扱った報告は少ない。光・映像を用いて思考力を養う造形活動の可能性について研究を進めることの必要性を感じる。そこでイタリア、レッジョ・エミリア市の先例を参考にして情報機器を活用して光・映像を扱った造形活動の教育的意義を探ることとした。

レッジョ・エミリア市の幼児教育を世界一と呼ばれる水準にまで高めたのが、ローリス・マラグッツィ (Loris Malaguzzi, 1920-1994) である<sup>1</sup>。同市では、第二次世界大戦直後に市民が立ち上がり、「草の根運動」として幼児学校と乳幼児保育所が建てられていった経緯がある<sup>2</sup>。同市での幼児たちの活動は、結果重視ではなく過程重視のプロジェクト<sup>3</sup>として進行している。そして教師は幼児の活動を詳細に記録し、学びや表現の生成変容の過程を可視化するドキュメンテーションが機能している<sup>4</sup>。

また、同市の幼児教育において展開される造形活動では石や葉、粘土等の自然物だけでなく工業製品の部品等の廃品を分別して使用するなど、多様な素材を用いるという特徴がある。同市では、光・映像も日常の環境をとりまく身近な対象として積極的に造形活動で使用されており、自然光とその影だけでなく様々な人工光を用いて活動している。これらの先進的な事例を参照する意義は大きいといえよう。

一方、幼稚園を含む日本の教員養成に関連して「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(答申)が中央教育審議会によってとりまとめられた。同答申では、「ICTの操作方法はもとより、ICTを用いた効果的な授業や適切なデジタル教材の開発・活用の基礎力の養成」<sup>5</sup>が教員養成大学に求められていることが明記された。情報機器の活用能力は、保育者に求められる重要な資質の1つとなりつつあるといえる。

以上の背景を踏まえ本研究では、幼稚園における造形活動に人工の光・映像をどのように取り入れることが望

ましいのかという点についての検討を行い、大学授業における情報機器の活用による授業実践を通して、光・映像を扱うことがどのような学びにつながるのかについて明らかにすることを目的とした。なお、人工の用具である情報機器を扱う意義は、幼稚園教育要領・領域「表現」における内容の取扱い(3)「遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」<sup>6</sup>によって担保されているといえる。

本研究推進にあたり研究の立案および調査、考察、論文執筆、原稿校閲は吉岡・竹内の両者が行った(執筆分担/吉岡:第1章および第2章・第2節、第3章・第2節、第4章、竹内:第2章 第1節および第3章 第1節)。なお、第3章でとり上げる大学での授業実践は、第2筆者である竹内が2017(平成29)年度に担当する授業科目において行い、その分析等は両者の協議によって行った。

## 2. 光・映像を扱った造形的な活動

### 2. 1. 日本における先行研究の動向および現状

レッジョ・エミリア市の保育実践が世界の幼児教育関

係者から注目されたのは『ニューズウィーク』(1991)誌上で、ベストスクール10校の1つとして同市の幼児学校が紹介されて以降であるとされている<sup>7</sup>。日本では、佐藤学や秋田喜代美らによってビデオ記録「ライオンの肖像を創る」が国内で紹介された<sup>8,9</sup>のが早期の着目例であった。その後、2001年に東京で開催された展覧会「子どもたちの100の言葉」<sup>10</sup>は、レッジョ・エミリア・アプローチの日本での評価が定着する契機のひとつであったといえる。これと前後して佐藤学ら<sup>11</sup>、石垣恵美子ら<sup>12</sup>による訳書等が出版されて以降、日本においてもレッジョ・エミリア・アプローチに関する理念や保育方法、保育事例等に関する研究が数多く展開されるようになった。本研究で中心的に扱う表現活動を対象とした研究論文に目を向けると、21報の論文(表1)を確認することができた<sup>13</sup>。これら先行研究群を概観すると、2000年代の前半においてはレッジョ・エミリア市の幼児学校の動向を紹介するものが目立つが(杉浦<sup>14</sup>、内藤<sup>15,16,17</sup>等)、同年代の半ば以降はレッジョ・エミリア・アプローチに関連する思想や方法を日本の保育現場や保育者養成機関等に導入することを試みた研究(豊泉<sup>18</sup>、手良村<sup>19</sup>等)も散見される。

先行研究群の中でも、特に光・映像を直接扱っている

表1 レッジョ・エミリア・アプローチに関連した表現活動を扱った先行研究群

刊行年	著者名	論 題	所 収
2000	杉浦篤子	イタリア レッジョ・エミリア市立幼稚園、保育園における造形美術への取り組み	藤女子大学紀要 第2部、38
2003	内藤裕子	ワールドレポート ヨーロッパ(15)北イタリア、レッジョエミリア市の実践アートを思考のプロセスに取り入れた 幼児学校の挑戦(1)	学校経営、48(3)
2003	内藤裕子	ワールドレポート ヨーロッパ(16)北イタリア、レッジョエミリア市の実践アートを思考のプロセスに取り入れた 幼児学校の挑戦(2)	学校経営、48(4)
2003	内藤裕子	ワールドレポート ヨーロッパ(17)北イタリア、レッジョエミリア市の実践アートを思考のプロセスに取り入れた 幼児学校の挑戦(3)	学校経営、48(5)
2003	岡本祐子	子どもの創造的な音楽活動を考える レッジョ・エミリア・アプローチの視点から	美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要、48
2003	友川絵美子	子どもの表現活動とその学習における可能性 レッジョ・エミリアの幼児教育実践を手がかりに	中国四国教育学会教育研究紀要、49(1)
2004	笠原広一	イタリア、レッジョ・エミリア国際会議 2004 -幼児教育の現在・芸術教育の未来	瓜生通信、30
2005	豊泉尚美	保育における「プロジェクト活動」について: レッジョ・エミリア市と狭山市公立保育所のプロジェクト活動をめぐって(幼児の造形表現をどのように支援したらよいのか)	日本女子大学大学院紀要・家政学研究科・人間生活学研究科、11
2007	高橋晃	モンテッソーリ、シュタイナー、レッジョ・エミリアにおける描画活動の意味	武蔵野大学人間関係学部紀要、4
2009	森真理	イタリア -響きあう市民生活の展開- 創造性と協同性を重んじるレッジョ・エミリア市に学ぶ (世界の保育現場でいま起きていること)	子どもの文化、41(8)
2009	坂井旭	創造性を大切にしたい世界の保育実践から学ぶもの -イタリア、レッジョ・エミリアの保育実践を通して	愛知江南短期大学紀要、38
2010	池内慈朗	レッジョ・エミリアとハーバード・プロジェクト・ゼロによるコラボレーション Making Learning Visible: 幼児教育から学ぶドキュメンテーションによる学習過程の可視化	美術科教育学会誌、31
2012	朴炫貞 (PARK Hyun-jung)	イメージフェノメナからレッジョ・エミリアを問う -教育における映像の可能性に対する考察	武蔵野美術大学大学院博士後期課程研究紀要、5
2013	倉持清美、阿部睦子、金子京子、妹尾理子、望月一枝	家庭科ふれ合い体験学習過程の可視化・共有化の試み: レッジョ・エミリア・アプローチを手がかりとして	日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集、56
2014	白山真澄	幼児の認知発達と創造性を育む「恩物」「教具」「素材」-フレーベル、モンテッソーリ、レッジョ・エミリアの教材の比較から-	東海学院大学短期大学部紀要、40
2014	手良村昭子	保育内容表現Ⅱ・教職実践演習での「影絵あそび」の実践を通じた学生の学びの考察: レッジョ・エミリアの幼児教育を参考にして	滋賀短期大学研究紀要、39
2015	高山理子	レッジョ・エミリアアプローチから導かれる授業の提案 あつめる・そろえる・ならべる: 日本の色と外国の色を感じて (第48回日本美術教育研究発表会)	日本美術教育研究論集、48
2016	植草一世、安藤則夫、馬場彩果、谷信子、鈴木朱美、尾形光穂、栗原ひとみ、広瀬由紀	子どもの遊びを活性化させるための素材庫(アトリエ)の可能性	植草学園大学研究紀要、9
2017	高野牧子	レッジョ・エミリアの幼児教育における身体表現性	山梨県立大学人間福祉学部紀要、12
2017	水島ゆめ	素材論: イタリア、レッジョ・エミリア市の文化的リソースセンターREMIDAのレポートを通して (第50回記念 日本美術教育研究発表会2016)	日本美術教育研究論集、50
2017	浅見均	表現とは何か: 世界の表現教育から: レッジョ・エミリア市の幼児教育から見えてくるもの (特集 子どもの表現力を高める)	教育と医学、65(1)

ものは2報である。以下、2つの先行研究について概要とともに本研究との関連を示す。

朴炫貞による論文<sup>20</sup>は、映像や光に着目して保育事例の詳細な検討がなされている数少ない研究である。レッジョ・エミリア市の保育事例を既刊本<sup>21,22</sup>等から抽出し、日本の美術大学において展開される映像の授業科目・イメージフェノメナンの4つの特徴と対比させることによって、その教育的意義について論じている。結論部において朴が述べている「映像は、教育対象でもあり教育における媒体にもなる」という視点は、本研究において光・映像を保育実践で扱う方法を検討する上で非常に意義深い。

また、前述の手良村昭子はレッジョ・エミリア市の幼児教育における「光のプロジェクト」に着目し、短期大学における授業科目で実践した影絵遊びの経緯と考察について報告している<sup>23</sup>。実際に幼稚園において保育実践を行い、保育の質向上を図っている点も特筆されるが、本研究は保育者を目指す学生の力量形成を図るうえで光と影を扱う効果について論じている点に着目した。教員・保育者養成の実践としても光と影を積極的に導入した例として先駆的であるといえよう。本研究の計画立案に際して、手良村による同研究から得ることができた示唆は大きい。

これら2報の先行研究が示す成果のうち、本研究では映像が教育の対象かつ媒体であるとの視点（朴による）、および光と影を活用した教材を大学授業において展開するという視点（手良村による）を導入した実践を進めたいと考える。それらの視点に加え、本研究では保育現場において情報機器を活用する方法についても考察を行うことを意図している。レッジョ・エミリア・アプローチに関連する造形教育研究という文脈において、情報機器の活用について言及した先行研究は、管見の限りその報告例は見当たらない。このため、筆者らはレッジョ・エミリア市に所在する教育関連施設を視察することによって、光・映像（情報機器の活用を含む）を造形教育で扱う方途についての調査を試みるとともに、光・映像を導入した造形活動を行う際に配慮すべき一般的な示唆を見出したいと考えた。

## 2. 2. ローリス・マラグッツィ国際センター（レッジョ・エミリア市）の視察を通して得られた示唆

先行研究等の概観により、レッジョ・エミリア・アプローチ関連の研究において光・映像についてふれた先例が複数あることが確認された。しかし、それらが扱う範囲は限定的であり、日本の保育現場において光・映像を取り入れた造形活動を行う際の示唆として一般化するためには、レッジョ・エミリア・アプローチにおいて光・映像を扱う際の基本的な思想について包括的に検討を行うことが必要であると考えた。そこで筆者らは、レッジョ・エミリア市に所在する教育関連施設であるローリ



図1 ローリス・マラグッツィ国際センター（外観）

Loris Malaguzzi International Center, Reggio Emilia

© Preschools and Infant-toddler Centers - Istituzione of the Municipality of Reggio Emilia and Reggio Children

ス・マラグッツィ国際センター（Loris Malaguzzi International Centre、図1）に着目することとした。

レッジョ・エミリアを象徴する教育者の名を冠した同センターは、工業用建物を活用し市内・国内そして国際レベルの研究と革新を促進する場として2006年にオープンしている<sup>24</sup>。同センターにはレッジョ・チルドレン（Reggio Children S.r.l.）の本部が設置されており、レッジョ・エミリア市内幼稚園の教育実践を国際的に普及・発信するための施設となっている<sup>25</sup>。このような普及・発信のために数々の展覧会が同センターで企画されており、国内外から多くの保育関係者・研究者らが視察・見学に訪れている。

筆者らは、2017年8月に同センターを訪問する機会を得た。その際、光の造形に関するプロジェクトを紹介する展示 *Ray of Light Interactive Exhibition*（イタリア語原題：*Atelier Raggio di Luce Mostra Interattiva*）の視察を行った。同展示の会場に示された解説によると、近隣の大学やレッジョ・エミリア市内の幼稚園等との協働によって、光の造形に関するプロジェクトが開発され科学的な視点も加えられた展示であるとされていた。

実際にこの展示 *Ray of Light Interactive Exhibition* を見て歩くと、空間全体が意図的に低い照度を設定されており、そのような環境の中で様々な光に関する多彩なプロジェクトが展開されていた。具体的な例としては、カラフルな光を透過させた壁で作られた空間構成や、多種多様な色彩や材料でできた素材をライティング・テーブル（下から光をあてる仕組みになっている照明台）によって照らし出すというプロジェクト、そしてオーバーヘッドプロジェクタ（OHP）を使用して素材をスクリーンに投影するプロジェクト等があげられる。また、他の展示室ではペンライトで描いた光の軌跡を残すための蓄光塗料が塗られた壁や光源との距離によって影の大きさを変化させる、拡大カメラを使ってプロジェクトで大きく投影する等のプロジェクトを見ることができた。

視察を通して筆者が解釈したこれらのプロジェクトの



教育的効果は、光や影を体感することを通して人と世界（空間）とがどのように繋がっているのかについて思考することができる、という点である。例えば、いつも日常生活で目にしているようなプラスチック製のカップをOHPの上に置くことによって幾何学的な平面の影となって壁面に大きく映し出される。立体的なものであっても、光を当ててできた影や透過する光がつくりだす像を見ることによって、対象を直視した場合と異なる捉え方が可能となる。また、対象と光源との距離を変えることで、投影される像の大きさを変えることができる。前述のプラスチック製のカップの場合、光と影による造形から細胞の断面や物質の結晶のような、小さな世界の中にいるような虚像ともいえる体験ができる。このように、光や影を媒体として人と世界（空間）との関係を感じたり考えたりすることは、幼児の感覚発達を図る上でも重要であると考えられる。

また、同プロジェクトにおいては人工の光源（ライティング・テーブル、OHP、プロジェクタ、ブラックライト、等）が多用されている。これら人工光を使用する意義を解釈する上で想起されるのが、レジオ・チルドレンから刊行された研究報告 *children, spaces, relations* における下記の指摘である（邦訳は筆者による）。

「私たちは自然光を白、そして中間的な物質という観点から考えることに慣れているため、自然光の特定の物理的性質や日中に起こる変化を考慮していません。／人工の光源の組合せと、これがそれぞれの影に及ぼす影響を意識することは重要です」<sup>26</sup>

自然光やそれらが照らし出す色彩の変化について扱うことは重要だと考えられるが、それらの光質をコントロールしてプロジェクトに取り入れることは困難であろう。気象や様々な条件によって変化する自然光と比較すると、人工光は手軽に扱うことが可能である。とりわけ、照明機器に加えて情報機器（PC、タブレットPC、プロジェクタ、液晶画面、等）の普及が進んだ近年は、指導者が多様な光源や映像をつくり出したり教材・教具を準備したりすることも十分可能であるといえよう。

これまでの議論をふまえると、幼児の造形活動において人工の光・映像を扱う際には、下記の3点について配慮した造形活動を展開する必要があると考える。

- ① 光や影の性質を発見したり感動したりすることができる活動
- ② 多彩な色光や映像を用いて、幅広い光を体験できる活動
- ③ 光源や対象の位置やそれらの間の距離を変えたり自身が光の中に入ったりして、光や影を体感できる活動

配慮することが望ましい事項の①として、幼児が光や影の性質を発見したり、感動したりする機会を提供することが重要である点を掲げた。先にふれた研究報告でも指摘されているように、幼児が日常生活における光や影

の微妙な変化を捉えることは難しい。そこで、多種多様な色彩や材料でできた素材をライティング・テーブルで照射したりOHP、プロジェクタ等を使用して素材をスクリーンに投影したりするなどして、光の透過や反射を認識したりコントラストを感じ取ったりする活動は、幼児にとって光と影の性質を発見したり意外な視覚的效果に感動したりする体験につながると考えられる。このような人工光の活用によって幼児の光による造形的体験を豊かにし、それによって感性を働かせる機会を提供することが重要ではないだろうか。

次に、②として人工光に特有の多彩な色光や映像を用いて、幅広い光を体験できる活動が有効であると考えた。光源自体に色をつけたり色がついた透過性の素材を加えてみたりして、色光が対象の形や色の見え方に与える影響を発見するなど、幅広く光を体験できる活動を設定することが望ましいといえよう。

そして、③は光源や対象を動かしたり光・映像の中に入ったりしてそれらを体感できる活動である。OHPやプロジェクタなどの光源や対象・スクリーンの位置を変えたりそれら相互の距離を変えたりする、または投影された映像の中に幼児自らが入ったり動いたりすることによって、身体に関わりながら光や影の特性、法則性などに気づく契機になるのではないだろうか。

次章では、上記の示唆を積極的に導入した設定保育を構成し、幼稚園教諭免許状の取得に必要な大学授業において試行した事例について紹介することとする。

### 3. 大学授業「幼児の造形表現」での展開事例

#### 3. 1. 授業実践の概要と経過

前章において論じた、人工の光・映像を扱った造形活動を指導する際の配慮事項のうち、①および②の事項を中心に導入し、PCやプロジェクタ等の情報機器を活用した大学授業の展開を試みることにする。具体的な実践を行った授業の概要を以下のシラバスに示す。

- |   |
|---|
| <p>【授業科目名称】<br/>「幼児の造形表現」（保育内容の指導法）</p> <p>【到達目標】<br/>幼児の造形活動を指導・支援するための基礎的知識・技能を身につけ、指導力を形成する。</p> <p>【授業計画】（内容と方法）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 幼児の造形表現（発達からみた特性）</li> <li>3. 幼児の造形と環境（レジオ・エミリア市の事例から）</li> <li>4. 子どもの主体性を引き出す環境と素材①</li> <li>5. 子どもの主体性を引き出す環境と素材②</li> <li>6. 子どもの主体性を引き出す環境と素材③</li> <li>7. 光・映像を使った造形表現（情報機器の活用例）</li> <li>8. 幼児の発達と描画表現（実際の幼児の作品研究）</li> <li>9. 表現を広げるための手だて（みんなで楽しむ人形作り）</li> <li>10. 紙素材と造形表現①（紙工作の技法）</li> <li>11. 紙素材と造形表現②（ポップアップカードの試作）</li> <li>12. 紙素材と造形表現③（ポップアップカードの題材化）</li> <li>13. ポップアップカード制作①</li> <li>14. ポップアップカード制作②</li> <li>15. まとめ（乳幼児の発達と保育カリキュラム）</li> <li>16. 筆記試験</li> </ol> |
|---|

授業科目「幼児の造形表現」は、幼稚園教諭免許状の取得に必要となる「保育内容の指導法」に該当する。同授業科目においては、15回の授業を通して保育者に求められる造形活動を指導するための基礎的な知識と技能を習得することをねらいとしている。前掲のシラバスに示す第7回授業（下線部）において、人工の光・映像を扱った造形活動の題材紹介と受講者による試作・考察の活動を行うこととした。この第7回授業の学習目標は、下記の2点である。

【学習目標1】光や映像による造形活動が幼児の造形的体験を豊かにする効果について考察する（前章①に関連）

【学習目標2】情報機器を活用して多彩な光や映像を投影する方法について理解する（前章②に関連）

授業の前半には、既習内容であるレッジョ・エミリア市の保育事例（第3回授業において記録DVD<sup>27</sup>を視聴）を振り返りながら、人工の光・映像による造形活動の教育的意義についての考えを受講者間で交流した。その際、授業担当者（竹内）からは、「絵画・工作などの作品として形が残るものだけが造形ではなく、光・映像などを体験することも広義の造形として捉えることができる」という点について課題提起を行った。

その後、光・映像によって光の水族館をつくるという設定保育を想定した演習を行うことを提案し、その内容と方法についての説明を行った。活動の導入部においては、レオ・レオニによる絵本『スイミー ーちいさなかしこいさかなのはなし』<sup>28</sup>の読み聞かせを行うこともあわせて受講者に提案した。図2は、第7回授業で使用した人工の光・映像を投影するための装置を示している。受講者が製作した海の生き物を透明アクリル板に貼付し、PCと接続したプロジェクタから発する色光や映像によってそれらの影をスクリーンに投影する仕組みである。海の生き物をつくる材料として、カラーセロハンや紙片（「レースペーパー」と呼ばれる洋菓子等の装飾材料）、丸シール、穴あきシール等を準備した（図3）。

受講者らは、『スイミー ーちいさなかしこいさかなのはなし』に登場する生き物を主題にしたり水族館を想起したりする等、設定保育を意識しながらの表現活動を行った。光がどのように透過するのかを確かめるために試行的にスクリーンに投影する姿が見られた。海の生き物が完成すると透明アクリル板の上に貼付し、光・映像を投影する準備を行った。プロジェクタに接続したPCにはMicrosoft社のプレゼンテーションソフト・PowerPointがインストールされており、これによって多彩な色光や様々な映像（珊瑚礁などの海中の画像）を投影した。実際に、受講者らが製作した海の生き物に色光を投影すると（図4）、光質が切り替わったり映像が映し出されたりするごとに驚きの声や感想のつぶやき等が聞かれた。

授業の後半には授業担当者から、保育現場において情報機器を活用する意味と、第7回授業において使用した

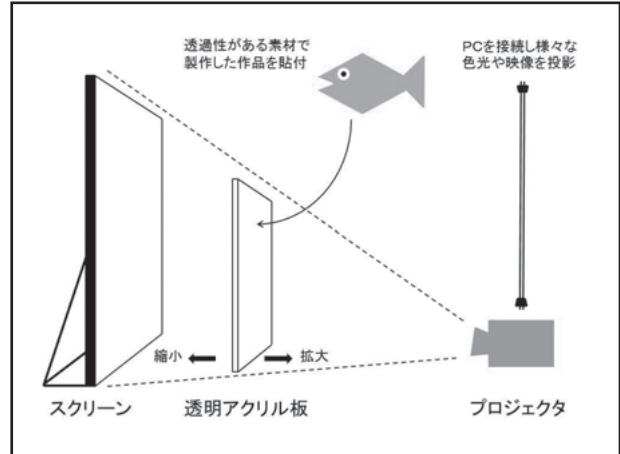


図2 人工の光・映像を投影する装置の概略

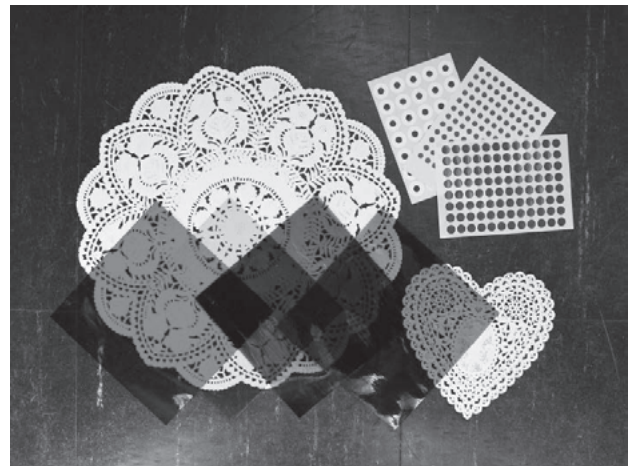


図3 第7回授業における演習で使用した材料等

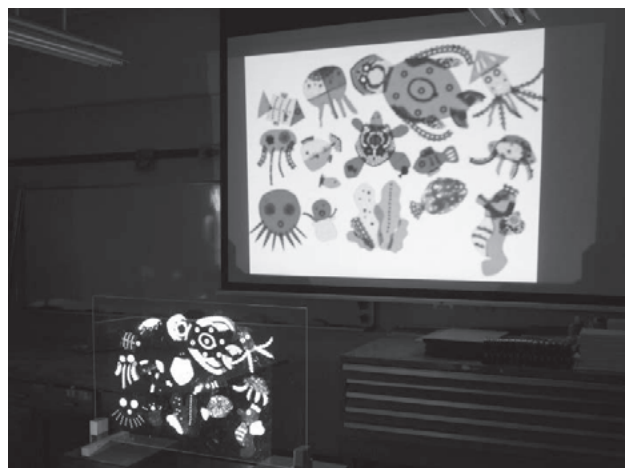


図4 色光を投影した様子（左手前は透明アクリル板）

情報機器の概要や具体的な活用方法についての説明を経て、各自の記述による学習内容の省察を行った。次節においては、この受講者らによる記述を分析の対象として、光・映像を扱った大学授業科目における実践の成果についての考察を行うこととする。

### 3. 2. 授業実践の成果

第7回授業の演習後、受講者に伝えた記述課題は「光・映像を扱った造形活動は、どのような点が幼児の育ちに有効だと考えるか。今日の授業内での経験をふまえて、自身の考えを述べましょう」である。これに対する全受講者・18名の記述のうち、【学習目標1・2】への対応が顕著であると考えられるものを抽出して以下に示す（抽出にあたり、筆者が前略・後略などを行った）。

#### 【学習目標1】光や映像による造形活動が幼児の造形的体験を豊かにする効果について考察する との対応が見られる記述例

##### 受講者A

「光は形がないものですが、形があるものと組み合わせて作品になるおもしろさがありました。一見どう作品にしたらよいかわからないものが作品になったときの感動があると思います」

##### 受講者B

「光と影でこんなにも美しく面白い造形表現ができるという新たな発見だった。モノを作って形に残るだけでなく、見て感動を味わうという楽しさを覚えることができると思う」

##### 受講者C

「『光に映ったらどのように見えるだろう』『模様はしっかり映るか』などの様々な想像がかきたてられ、想像力が育てられる。また、光をつけた瞬間、パッと完成が見える感動、喜びはとても大きい」

受講者Bのコメントにおいては「光と影でこんなにも美しく面白い造形表現ができるという新たな発見」、そして受講者A、B、Cのコメントには共通して「感動」という記述が見られる。このような点からは、受講者らにとって第7回授業が光や影の性質に驚きをもって気づく機会であったことを読み取ることができる。これは前章で指摘した、人工の光・映像を扱った造形活動における配慮事項①に対応した受講生の学びの成果を示唆するものであるといえる。また、「一見どう作品にしたらよいかわからないものが作品になった時の感動（受講者A）」「『光に映ったらどのように見えるだろう』（受講者C）」「様々な想像がかきたてられ、想像力が育てられる（同）」という受講生らの記述からは、人工の光や映像による造形活動が幼児の様々な想像力や思考力を働かせる契機となり、光や映像の視覚効果による体験によってさらに感性を豊かに働かせるという可能性を持っていることについての考察が深まったことが推察される。

#### 【学習目標2】情報機器を活用して多彩な光や映像を投影する方法について理解する との対応が見られる記述例

##### 受講者D

「今、幼児の身の周りには太陽の光の他にも、スマホの光など電子機器からの光も容易に触れることができます。そんな現代だからこそ光・映像を使った造形はやりやすいものになってきていると思いました」

##### 受講者E

「普段何気なく生活していると光の存在はなおざりにされがちですが、光を扱った造形活動を行うことで光っておもしろい！と感じられ、幼児に新しい視点が生まれると思います。スライドで映像が変化していくと、見え方が全く異なりました」

受講者Dのコメント内に「今、幼児の身の周りには太陽の光の他にも、スマホの光など電子機器からの光も容易に触れることができます」「現代だからこそ光・映像を使った造形はやりやすいものになってきている」との記述がある。受講者Dにとって第7回授業は、人工の光・映像を活用した造形活動の意義について意識する機会になったのではないかと考えられる。一方で受講者Eは「スライドで映像が変化していくと見え方が全く異なりました」と述べている。この記述から、同受講者はPCに接続したプロジェクタがつくりだす色光が対象の形や色の見え方に与える影響を認識したことを読み取ることができる。また同受講者は「光っておもしろい！と感じられ、幼児に新しい視点が生まれると思います」とも記述している。将来の保育者として幅広く光を体験できる活動を設定する上での情報機器の活用することの必要性の気づきにつながったのではないだろうか。

### 4. 結論

前章までの議論を通して導き出された研究の成果は、下記の2点である。1点目は、先行研究およびローリス・マラグッツィ国際センターの視察によって得た先例を検討した結果、幼児の造形活動において人工の光・映像を扱う際には3つの配慮事項を導き出すことができた点である。一般的な描画や立体造形とは異なる特性をもつ光・映像を題材化する際の一助を示すことができたと考えている。2点目として、大学授業での試行を行った結果、【学習目標1・2】に対応した効果の傾向が見られた点をあげることができる。

一方で、研究上の課題も明らかとなった。1点目の課題は、第2章でふれた配慮事項の①、②については授業実践に関連させることができたが、配慮事項③については未着手という点である。この点については、今後の継続研究の中で扱っていきたい。具体的には、第7回授業で使用した透明アクリル板のような固定した装置に加え、幼児がクリアファイル等にカラーセロハン等をはさんで手に持つことで、光源にあてながら自由に距離を変えて、影の様子を変化させる活動となる可能性がある。このように、幼児自身が光源と対象、そしてスクリーンとの位置関係を変化させていくことが、光を体感する活動に繋がっていくのではないかと考える。なお、これらの活動は作品として残すことは難しいが、光の中に入って活動している様子はとても魅力的である。このため保育者が



活動の様子を撮影したり、幼児が光と影についての体験を絵に描いて活動中の思考の形跡を残したりする手立てなどが有効であろう。また、活動中の幼児のつぶやきを記録して、幼児や保育者が共有できるものにしていくことも有効であると考えられる。

そして2点目として、大学授業の受講者らの情報機器を活用する能力を形成することに関する課題があげられる。改善策としては、プレゼンテーションソフトの使用など情報機器の操作についての学習に取り組む他授業と連携し、光・映像を用いた造形表現を関連づけてICTの活用方法を学ぶ必要があるだろう。今後の継続研究においては、受講者自身が人工の光・映像を操作したり選択したりする活動等を導入し、デジタル教材開発の基礎力向上を図りたいと考えている。

## 付記

大学授業「幼児の造形表現」を受講する皆さんから、記述課題のテキストデータおよび作品画像をご提供いただきました。心より感謝申し上げます。

本研究の開始にあたり奈良教育大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の審査(受付番号 29-10)を受審し、本研究遂行に関して承認を得ている。

## 注

- 1) 佐藤学 (2001), 「レッジョ・エミリアの教育とその背景」(訳者解説), C. エドワーズ/L. ガンディーニ/G. フォアマン編, 佐藤学・森眞理・塚田美紀訳『子どもたちの100の言葉 -レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世織書房, p. 500.
- 2) 森眞理 (2009), 「イタリア -響きあう市民生活の展開 -創造性と協同性を重んじるレッジョ・エミリア市に学ぶ(世界の保育現場でいま起きていること)」『子どもの文化』第41巻8号, 文民教育協会子どもの文化研究所, p. 79.
- 3) 同上論文, p. 83.
- 4) 秋田喜代美 (2003), 「レッジョ・エミリアの教育学 幼児の100の言葉を育む」佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力と育む アート教育の思想と実践』, 東京大学出版会, p. 88.
- 5) 文部科学省, 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ~学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて~ (答申)(中教審第184号)」, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm), アクセス2017年11月27日.
- 6) 文部科学省, 「学習指導要領等『幼稚園教育要領』」, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384661.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm), アクセス2018年1月12日.
- 7) 秋田 (2003), p. 73.

- 8) 佐藤 (2001), pp. 498-499.
- 9) 秋田 (2003), pp. 73-76.
- 10) 「子どもたちの100の言葉」展, 会場: ワタリウム美術館(東京都渋谷区), 会期: 2001年4月28日~6月24日.
- 11) C. エドワーズ/L. ガンディーニ/G. フォアマン編, 佐藤学・森眞理・塚田美紀訳 (2001)『子どもたちの100の言葉 -レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世織書房.
- 12) J. ヘンドリック編著, 石垣恵美子・玉置哲淳監訳 (2000), 『レッジョ・エミリア保育実践入門 保育者はいま, 何を求められているか』, 北大路書房.
- 13) 先行研究を収集する方法として, 情報・システム研究機構国立情報学研究所が提供するCiNii Articles (NII論文情報ナビゲータ, <http://ci.nii.ac.jp/>)を使用して, 下記のフリーワードによって検索を行い, それらを合計した(合計の際, 重複して該当したものは除外した)。
 

「レッジョ・エミリア+アート」「レッジョ・エミリア+映像」「レッジョ・エミリア+造形」「レッジョ・エミリア+創造」「レッジョ・エミリア+美術」「レッジョ・エミリア+描画」「レッジョ・エミリア+表現」
- 14) 杉浦篤子 (2000), 「イタリア レッジョ・エミリア市立幼稚園, 保育園における造形美術への取り組み」『藤女子大学紀要』第38号(第Ⅱ部), 藤女子大学, pp. 41-48.
- 15) 内藤裕子 (2003), 「ワールドレポート -ヨーロッパ(15)北イタリア, レッジョエミリア市の実践アートを思考のプロセスに取り入れた 幼児学校の挑戦(1)」『学校経営』48巻3号, 第一法規出版, pp. 74-79.
- 16) 内藤裕子 (2003), 「ワールドレポート -ヨーロッパ(16)北イタリア, レッジョエミリア市の実践アートを思考のプロセスに取り入れた 幼児学校の挑戦(2)」『学校経営』48巻4号, 第一法規出版, pp. 86-90.
- 17) 内藤裕子 (2003), 「ワールドレポート -ヨーロッパ(17)北イタリア, レッジョエミリア市の実践アートを思考のプロセスに取り入れた 幼児学校の挑戦(3)」『学校経営』48巻5号, 第一法規出版, pp. 48-51.
- 18) 豊泉尚美 (2005), 「保育における「プロジェクト活動」について: レッジョ・エミリア市と狭山市公立保育所のプロジェクト活動をめぐって(幼児の造形表現をどのように支援したらよいのか)」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』第11号, 日本女子大学, pp. 1-16.
- 19) 手良村昭子 (2014)「保育内容表現Ⅱ・教職実践演習での「影絵あそび」の実践を通じた学生の学びの考察: レッジョ・エミリアの幼児教育を参考にして」『滋賀短期大学研究紀要』第39号, 滋賀短期大学, pp. 17-39.

- 20) 朴炫貞 (2012), 「イメージフェノメナンからレッジョ・エミリアを問うー教育における映像の可能性に対する考察」『武蔵野美術大学大学院博士後期課程研究紀要』第5号, 武蔵野美術大学, pp.89-105.
- 21) レッジョ・エミリア市乳児保育所と幼児学校, レッジョ・チルドレン原本発行, 田辺敬子・辻昌宏・木下龍太郎訳 (2001), 『子どもたちの100の言葉ーイタリア／レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録』, 学習研究社.
- 22) 佐藤学監・ワタリウム美術館編 (2011), 『驚くべき学びの世界ーレッジョ・エミリアの幼児教育』, 東京カレンダー.
- 23) 手良村, 前掲論文.
- 24) Vecchi, V. (2010). “The Loris Malaguzzi international centre,” *Art and creativity in Reggio Emilia: Exploring the role and potential of ateliers in early childhood education* (New York: Routledge), p.167.
- 25) Reggio Children, Identity, <http://www.reggiochildren.it/identita/?lang=en>, アクセス 2017年11月27日.
- 26) Ceppi, G., and Zini, M. (eds.) (1998). *Children, spaces, relations: Metaproject for an environment for young children*. (Reggio Emilia: Reggio Children), p.49.
- 27) 佐藤学・秋田喜代美監 (2013), 『子どもたちの100の言葉 レッジョ・エミリア市の挑戦2001(DVD)』, ワタリウム美術館・グループ現代・レッジョ・チルドレン.
- 28) レオ・レオニ, 谷川俊太郎訳 (初版・1969), 『スィミーーーちいさなかしこいさかなのはなし』(第116刷), 好学社.

#### 図版出典

- 図1 レッジョ・チルドレン (Reggio Children S.r.l.) より提供を受けた。
- 図2 筆者作成
- 図3 筆者撮影
- 図4 同上